

【梅本克己氏の足跡と当館資料概括】

梅本克己氏は、1912年に栃木県に生まれ、群馬、新潟、千葉の学校を転々としたのち水戸高校入学、34年に東京帝国大学に入学、和辻哲郎に師事し哲学の勉学に打ち込みます。42年に母校水戸高校の教授となりますが、リベラルさゆえに学校から目をつけられ45年4月授業を外されるなどの仕打ちを受けます。終戦とともにマルクス主義に接近し、唯物史観に自らの哲学的な思索の位置を見いだしました。

戦後時期を同じくして文学者による主体性論争が起こりました。戦争協力者に対する政治的断罪に反発し内的・自省的な議論を求める文学者に対し、「左派」は理論の真理と革命の必然を対置します。それに対し、梅本氏はマルクス主義において個々人が実践へと主体的に決意する領域については明らかになっていない「空隙」があると主張しました。47年に発表した「人間的自由の限界」と「唯物論と人間」の2つの論文でそのことを主張しましたが、「左派」からは「観念論だ」と集中砲火を浴びました。以降、49年まで梅本氏は一人果敢に論争を続け、ソ連指導者に追従していた当時の「左派」に疑問をもっていた人びとに強い影響を与えました。

この47年から49年までの戦後主体性論争が梅本氏の第一の功績です。その後、安保闘争や大学紛争など政治的なテーマに見解を述べ、また「資本論」を科学として再構成した宇野弘蔵氏との論争、中国文化大革命に関する遠坂良一氏との対談など、74年1月に亡くなる間際まで、病気で苦しみなながらも論壇で活躍し続けました。

* * *

当館には、梅本氏が亡くなったときに所有していた蔵書がすべて寄贈されています。

まず、「梅本克己著作集」全10巻や編集に関わった「岩波講座 哲学」全18巻をはじめ、梅本氏が執筆したほぼすべての著作、抜き刷り、「思想」「展望」「現代の眼」などの論文掲載誌、全国紙や「新しいばらき」を含む新聞各紙、ミニコミ紙や党派機関紙があります。たとえば、経済学者降旗節雄氏との論争に関して「著作集」では梅本氏分のみですが、当館のファイルでは時系列でやりとりがわかります。梅本氏没後の追悼記事などもそろっています。

蔵書は、哲学を中心に明治期のもの、中学、高校、大学時代の書籍を含め約3000冊（うち戦前の資料約900冊）、戦前の「思想」「文学」を含む定期刊行物が約1000冊あります。そのほとんどに書込が見られ、学問への打ち込みようをうかがえます。また、学究上で関わり贈呈された抜き刷りが多数あります（鈴木亨、芝田進午、大井正、安東仁兵衛…）。

ほかに原稿、ノート、日記、手帳、書簡などがあります。原稿は、大学の卒業論文である「親鸞における自然法爾の論理」が大切に保管されていた他、出版社から戻された原稿の束が残されています。ただ、多くが数枚単位の断片になっており、整理には多くの時間を要します。

ノートは学生時代から研究に携わって以降のものを合わせ100冊以上が残されています。その他に、ノートに記載されたものを含めて日記として書かれたものがあり、

大部分は著作集に収録されていますが、未掲載のものが一部あります。さらに日常のスケジュールを管理していた手帳が1952年から亡くなる直前まで残されています。また、丸山眞男、清水幾太郎、梯明秀、津田道夫の各氏から梅本氏に宛てた書簡のほか、手紙類が180通ほど、はがきは年賀状を含めて650通ほどが残されています。

「著作集」が梅本氏の論考の相当部分を収録していますが、未掲載論文をはじめ「著作集」からは見て取れない梅本氏への批評、梅本氏の間人関係など興味深い資料が多数あります。古い書籍の中には他の図書館では見られないものも少なくありません。ぜひ、ご活用ください。